

祝

2016年7月 早稲田大学博士号(商学)取得

## 玉置浩伸さん(取得時50歳)

【論文テーマ】出身企業における破綻等の問題が起業家およびベンチャーのパフォーマンスに与える影響 — 定性・定量両面からの探索的アプローチ —  
自身のベンチャー経験とノウハウを日本の若者に。そのための博士号

## ■ベンチャーにおける3者の立場を経験

玉置浩伸さんは、現在家族と共にオーストラリアに住んでいて、日本には仕事をしに半年だけ帰国する。仕事は、九州大学の客員教授としてベンチャー経営の講義を受け持つほか、教え子が立ち上げたベンチャー企業の社外取締役として、資金提供者になくなどのフォロワーをしている。常時2、3社から依頼されているそう。来年度からは青森大学、慶應義塾大学でも講義が決まっている。

玉置さんは東京大学卒業後、商社にて、シリコンバレーのベンチャー企業投資や国内でのM&A実務などを経験する。2001年に退社し、『ゴルフダイジェスト・オンライン』を共同で創業。2004年、上場を機に退任し、ベンチャー投資会社を創業。2005年には、米国でキー店のチェーンを創業。投資する側、起業する側を経験し、3本柱のもう一つ、若い起業家の育成とアドバイスをする立場も経験したいと思い、大学の教員を目指す。そのため博士号が必要だった。

## ■リストラや破綻から起業して成功する人たち

博士論文は、起業家がどのように誕生するのか、自らの経験に基づく仮説を学術的に証明するものだった。もう一つ、ベンチャーに関して当時の世の中の言説や、大学、政府の方針が的外れだなと感じていたこともある。

大学は大学発ベンチャーを打ち上げたり、産学連携を模索したりしたが、うまくいった例は多くない。予算圧縮に伴う人員削減など大学側の都合や不純な

動機が見えた。政府は政府で、アメリカで起きたGoogleやFacebookなどに倣って、ベンチャーからイノベーションと言いつつ始めたが、まったく現実をみておらず夢物語でしかなかった。

「実際に日本のベンチャーはどういうところから起こっているのか。実はイノベーションやR&Dのようになかった話ではなく、リストラや企業破綻に遭遇してやむをえず起業するなど、泥臭いところから多くの起業家が出て成功しています。それをこの論文で示したかったです」

そうした起業の一例をあげると、一時破綻しかけた大京グループからは、多くの起業家が出ている。理由は、ビジネスモデルがシンプルで、資金さえあれば誰でも始められるからだ。ある程度経験を積んだ40〜50代の人起業して成功を収めている。日本



博士号を取るまでの6年間、家族からは「いい歳をして何やっての。やめたら」と言われ続けたが。

長期信用銀行の破綻からは、金融的ノウハウを持っている人たちが不動産のリート化やファンド運営などで起業、アセット・マネジャーやリサーチ・パートナーズなど成功企業も多い。

論文の定性分析の一環で、リストラや破綻経験ありとなしの起業家群に対照インタビューをした。「破綻経験者たちは、そもそも起業するつもりなどありませんでした。イノベーションを起こそうなどとは考えてません。会社を放り出されて、収入がなくなってしまう。それまで会社で培った経験やノウハウを活かして、比較的风险が少ない起業をして成功したんだと話しました」

## ■もっとガツガツしていい日本の若者たち

日本の論文執筆数、特許出願数など、研究力やイノベーション発信力は諸外国と比べて落ちている。若者たちも、そこそこの幸せで満足なのか、起業して成功するぞとガツガツした学生は少ない。大阪商人の家に育った玉置さんからすると不満だが、それも時代なのかもしれない。

「世界的な起業家の多くが、家族と過ごす時間が少なかったことを後悔するそうです。それだけトップは寝る間も惜しんで働きます。私自身は体力面も含め起業家としては引退ですが、大学の講義を起業家との接点として、元気のある学生が起業したとき、できる限り支援したいと思っています」

財団の博士号取得支援事業は、財政的支援というだけでなく、大学教員にとって助成を受けたことは一つの業績にもなるので、大変感謝しております」